質疑応答

司会:小池　三枝

＜研究発表＞　「人情本にみる近世後期の服飾文化―芝居、書画にかかわる趣向―」　大久保尚子

問：腮尾尚子（お茶の水女子大学・院）

腮尾と申します。比較文化学専攻です。近世文学を勉強しています。衣装の文様に関してはまったく素人ですが、たいへん興味があって、おうかがいします。レジュメの№.１の三津五郎縞のことですが、歌舞伎役者の名前を織り込んだ文様は、たとえば菊五郎格子とか三升格子とかいろいろあるかと思いますが、縞模様と格子模様とは区別されて名前が付いているように思います。こちらの羽織の襟は私には格子模様という気がします。こういう場合でも、交差している場合でも、何々縞という言い方をするものなのでしょうか?

答：大久保尚子

基本的には、縞というと縦なり、横なりの直線の文様ですが、格子縞という言い方がありますように、格子でも縞という言葉で表される意匠の分類に入ると思います、広義では。たとえば三升縞などと団十郎にちなんだ３本、３本の格子のことをいうことがあり、ななめ、90度なりに交差している縞文様でも縞と呼ばれた可能性はあると私は考えます。この三津五郎縞はもしかしたらこういうものではないかというのは、最近考え始めたことです。小学館の古典文学全集で前田愛先生が解説されている例では、その部分を、三筋に大の字をつないだ三津大縞を想定されているようですが、三津大縞であれば三津大縞といいそうなもので、そうすると、三津五郎縞と三津大縞とは別のものなのではないかなと気になっていまして、その一方で、ここに挙げたような五本、三本のななめ格子が三津大縞などより多く三津五郎の絵に出てきます。あるいはこれがそうだったのかなと考えてみたわけです。女性のこのような服飾に表すには、三津大縞はいかつい感じがしますので、もしかしたらこういうものの可能性もあるのではないかと、これは推論の段階です。

問：腮尾

どうもありがとうございました。三津大縞のお話をうかがってまして、三津大は三津五郎の紋所ですから、三津五郎の象徴ということで、三津大縞が三津五郎縞かなとおききしていました。

司会：小池

私も記憶では、合巻の挿し絵にやはり格子で間に「つ」の字が片仮名で入って、多分これが三津五郎縞ではないかと思うような例を見たと思います。

他に何かご質問ございませんか？服飾のことで限られたものですと、他の分野の方からの質問も出にくいかも知れませんが…。

問：金英（お茶の水女子大学・院）

人間文化研究科比較文化学のドクター２年の金と申します。平安時代の文学を専攻しております。服飾の中に花押として、いろいろな花の模様が、刺繍として、押しとして、行われていると思います。こちらの図を見ると、柳や菜の花、梅の花などの花が描かれていますが、この花の種類は作品の人物の性格や作品の背景に関わってくるのでしょうか?

答：大久保

もし具体的にどの例とご指摘いただければ、何かお話しできるかと思いますが…？

問：金

スライドの最後の4枚目に蘭の花が刺繍されてましたね。

答：大久保

一番最後のは紺色に竹の模様の実物ですが、その前の帯に蘭とか竹の模様が表されている例ですか…。

問：金

時代の反映にも関わってくるんですか?

答：大久保

蘭や竹は文人画の題材の墨蘭とか墨竹から来ているものだと思うのです。実際に絵として墨蘭や墨竹が描かれて、それを文様として絵そっくりに写したということと思います。ご指摘のようにただ絵の美しさや線の妙味を写す、鑑賞するというだけではなく、本来、墨蘭、墨竹、最後の竹の文様もそうですが、文人画の画題としてそもそも選ばれた所以である、ある種の精神性を尊ぶという意味があって衣服の文様として選ばれているのだろうと思います。基本的には。

問：金

植物の木や花の模様以外の模様はあったのでしょうか?

答：大久保

今日お話したのは、そういう植物などの模様だけではなくて、いちばん自然とは遠いような判この模様がたくさん出てくるというようなことをお話をしたわけです。近世の服飾の文様にどんなものが題材にされるかといいますと、文様にならないものはないというくらいいろいろなものがあります。先ほどの腮尾さんのご発表にも絵銭の模様が衣服に出てくるという例がありましたし、そういう器物の文様、非常に微少な印章の細かい文字まで再現するような文様から、写生的な植物などの文様まで幅広くあるといえると思います。

司会者のまとめ

小池　三枝

服飾は日常的な生活に根ざし、つねに人間の心身のありようと密接にかかわりながら、さまざまな国・民族・地域などの歴史のなかで、時代とともに形を変えて続いてきた。

歴史的・文化的な側面から考えると、日本の服飾は、古代から、ある場合には慣習や儀礼に結びついて形式を整え、ある場合には文学作品や絵画などに描かれて、心情表現や人物描写の役割を担ってきた。文学や絵画だけでなく、舞踊・演劇・芸能などの諸芸術において、服飾は個別的な表現として、あるいは記号的な表現として効果的に用いられている。このような服飾は、それ自体が独自に変化交替してきたのではなく、服飾（人間）をとりまくさまざまな文化現象と相互的な影響関係を保ちつつ今日に至っている。